

月でもない。星でもない。

mono

ダリア

渡り廊下の柱と柱の間、窓の真下。

放課後、誰もいないはずの2階にあたしが一人、ぽつんと座っている。

さっきまで同じように廊下に座り込んで横で話していた裕美は、あたしが携帯をいじってる間にいなくなっていた。夏が過ぎるとどうにも切なくなってしまう。日ごとに秋に近付いていく風が憎らしい。

あたしは今年の夏に失恋した。忘れもしない8月の15日。

もう既に携帯のメモリーからは消え去った名前、安岡くん。懐かしい憎たらしい名前、安岡くん。別れる時くらいメールじゃなくて会って話そうよ、安岡くん。

意気地なしだなあ。ずるいなあ。

それから一ヶ月後の今日、まだ涙は乾ききってはいなかった。彼から久しぶりに「おはよう」を言われて、たまらない悔しさと嬉しさと自分への情けなさに、胸がいっぱいになりました。

そう、それを裕美と話していたんだって。全部正直に話していたのに、まだ続きなのに、どこにいったんだろ。

その時廊下の向こうの1組の教室で男女の話声が聞こえた。耳をすますとそれは、愛の告白。男の子から女の子に。いいね。素敵だね。他人の恋愛話は無責任に聞けて楽しい。

「ただいま。お土産に購買でドーナツ買ってきたけど食べる？」

彼女の買ってきた新発売の抹茶マロン味。抹茶も栗も嫌いなあたしにとってこれ程酷なおやつはないわけです。

「ごめんね、食べれないの。それよりどこ行ってたの？」
「中学の頃の友だちから電話きてたの。加奈子って知ってるっけ？」

「んー...と、写真で見たことある」

「妊娠したんだって」

青い廊下にあたし達の影がのびている。

1組の男女はどうなったんだろう。もう話し声は聞こえない。

「親に内緒で中絶費用集めてるらしいんだけど...」

「あたし親の許可無しでできるって噂の病院聞いたことある。」

「あんたっていつも変な事ばかり知ってるよね。また部活の先輩に聞いたの？どこ？」

「教えない」

だって

「そういうことは大事だと思うから。」

だんだん空が暗くなって、寒さを増した。

日が短くなってんだ。...もう秋なんだ。

時間は過ぎていっちゃうんだ。なのにあたしは動けないまま。

「わたし、なんて言ってあげれば良かったんだろう。」

裕美の声が震えていた。

なんだかあたしも泣きそうだった。

こんな話は初めてじゃない。

友だちの元同級生とか...そんな人たちの話は何度か聞いたことがあった気がする。

あたしたちは若くて幼くて、だから頭が悪くって。

愛っていうのを吐き違えて勘違いして好きになって嫌われて嫌いになって。

何度も何度も後悔するのに、また新しく繋いだ手があったかければそれでよかった。

だってね、愛されるのってすごくすごく幸せなんだよ。

抱き締められのって気持ちよくって。

お願いあたしを否定しないで。

もしあたしがまだ好きだったら気持ち悪い？

うっとおしい？

安岡くん。

「帰ろっか。」

裕美が立ち上がった。

ふいに抹茶マロンの香りがした。空には薄い色の月。

あたし達は愛されたがりだ。

難しい、なんにも間違えずに恋愛なんてきっと誰にもできない。

うっすらと星が出ていた。

指の先が少し痛い。

空には三日月。明日は水曜日。

じゃあね安岡くん。また明日。

煙突

「自分の中のルールを守っているなら、好きじゃない人としても問題は無い。」

と、大学で同じ専攻をとっている洋子は言った。

ルールは人それぞれあると思う。

避妊や病気に気をつけるとか、彼女の居る人とはしないとか。

ふと顔を上げると、昼前の太陽がコンクリートを照らしている、その進行方向の、ずっと向こう。

赤と白のしましまの煙突が見える。

小さい頃に住んでいた家の二階の窓からもこの煙突は見えた。

背伸びしないと届かない窓から、いつも見ていた。

ぐんぐん空へ向かって行く白い煙が雲に混ざって溶けてゆく。青空にオーロラを作る。

あと10分程このまま真っ直ぐ走れば、わたし達は煙突の真横を通り過ぎるだろう。

でもそれはできない。

煙突に辿り着く前にホテルに着いてしまうからだ。

今わたしの隣には彼女がいない男の人がハンドルを握っている。

助手席に座っているわたしも彼氏がいない。

わたしの中のルールでは、まったく問題が無い2人。

わたし達がこうして会うのは初めてじゃない。

わたしも彼を好きじゃなくて、彼もわたしを好きじゃなくて、

そんな関係の中でする恋人同士の真似事みたいな時間がすごく愛しいのだ。

頭を撫でるのも抱きしめることも、それ自体は嘘じゃない。

嘘じゃないけれどそこに想う気持ちが絡まっていないだけでまったく別のものになる。

「窓開けてもいい？」

彼の暑いからといってすぐクーラーに頼らないところが良いと思う。

わたしの髪が風で乱れるのを気にして、

開ける前にきちんと確認してくれるところも。

「うん、いいよ」

走り続ける2人にしましまの煙突はぐんぐん近づいていく。

白い煙はまるであの頃から途切れることなく生まれているみたい。

少女へと

シーツの上に吸殻を落としてしまった。

真っ白のくしゃくしゃの上。指で拭うと触れた灰が広がって影になった。

ラブホテル選びはいつも慎重に行っているつもりだ。

内装はできるだけ悪趣味で、それでいて清潔感のあるところ。

両方を兼ね備えたところはなかなか少ない。

外観は奇抜でも中に入ると至って普通のところが多いから。

プラネタリウム、ブラックライト、ミラーボール、まあいベッド、鏡張りの壁、心惹かれるものはいくらでもある。

今日のホテルは合格。私は天井に星空がついているのが一番好き。

今時そういうのがあるホテルの方が珍しいかもね。

そう言いながら七色に光る湯船にお湯を張る彼は、ちゃんこの空間を楽しんでいる。

低いけれど聞き取り安い声が、バスルームの壁に反響しやわらかく空気を埋めて、
ごうごうと唸る水音と一緒に私の耳までしっかり届く。

私達はお風呂に2回入る。行為の前と後。一緒に入る事はない。

さっきは私が先に入ったから、今度は彼が先。

タオル地のバスローブはなんだかくすぐったい。

「浴衣があるといいのに。」と呟くと、「それじゃ温泉旅館になっちゃうよ。」と遠くで笑われた。

私の声もバスルームまでちゃんと届いている。

遮光カーテンで外の明るさはわからないけれど、そろそろ日が沈む頃だろう。

一人でベッドに腰掛けて煙草を吸いながら待つ間、30分程前の事を思い出す。

じっとりした偽者の星空を見つめながら、仰向けに寝そべて二人でジンライムを飲んだ。

彼は恋人の話をした。死んでしまった高校時代の恋人の話を。

「なぜか映像で残ってるんだよ。その瞬間を見ていたわけじゃないんだ。

死んだ知らせも彼女の友達から電話で聞いたくらいなのに。

それなのに僕の中には自転車に乗ったままトラックに跳ねられる彼女の最期の姿が映像で残ってるんだ。」

私も想像した。セーラー服の女の子が、宙に舞って飛んでいる姿。

「17歳の頃の出来事だし、それを今までずっと引きずってきたわけじゃない。

新しい彼女もいたし。」

女の子は地面に投げ出される。自転車と鞆、脱げてしまった靴の片方がアスファルトの上に転がっている。

「でも、たまに、本当にたまに、強烈に思い出す。
それでどうしようもなく落ち込んじゃうんだ。」

それがどうして今日、今なのだろう。
なぜだか私は突然淋しくなり、隣にいる彼を抱きしめたいと思った。
せめて手を握るだけでも。
だけどできない、してはいけないことのような気がした。
さっきまで繋がっていたのに、“手を握る”、その簡単な動作のなんと重いことか。

ルールは規制する為にあるのではなく、自分を守る為にある。
自分で作ったその線引きは、これ以上踏み込めば傷付くかもしれないという
境界線に過ぎなかったのだ。
わたしは目の前の柵を乗り越える勇気があるだろうか。
その為には曖昧な関係に守られてきた本当の気持ちをさらけ出して、
無防備な少女に戻らなければいけない。
17歳の顔も知らない女の子に嫉妬しながら。

人間てめんどくさい、世界なんてなくなっちゃえばいいのに。
あの時彼は悲しそうに笑ってそう呟いた。
そんなこと思わないけど、私も頷いた。
彼もきっと思っていない。

時間が過ぎることでもなにもかも解決するわけじゃない。
だけど、この世界の大部分の物事は不思議とそんな不確かなものに救われていると思う。

星空の向こうにオーロラを見た気がした。

ギブス

拓ちゃんが右の手首を全治2ヶ月の骨折をしたのは3日前の事だった。

「骨が折れたってというかね、こう、骨と骨の繋がってる部分がずれちゃったんだって。」

そう言って拓ちゃんは両手のげんこつ同士をくっつけて説明してくれる。げんこつが骨の繋がってるところ。右手はギブスをしているから指先しか見えない。説明にあまり興味もてなくて、机の向こう側に座っている彼の白くてザラザラしたギブスをイスに座ったまま身を乗り出して撫でた。

放課後の教室はもう誰もいない。部活の人達は着替えて出て行ってしまったし、残って勉強する人達はそれ専用の教室が用意してある。2階の理科室の隣だ。冬は備え付けの暖房の他に電気ストーブが置かれるから、この学校では校長室と職員室の次に暖かい教室になる。

努力して頑張る人はやっぱり優遇されるよね。

前にあたしがそう言うと、拓ちゃんは少しだけ笑ってそうだね、と言った。努力して結果が出なくても、努力した事だけでも認めてもらえれば次に頑張る気持ちに繋がるからね、とも。

拓ちゃんはいつも先生みたいなことばかり言う。黒い短い髪の毛。制服も黒。鞆も黒。ギブスだけ白い。真っ白で、固くて冷たい。

拓ちゃんは運動部じゃない。ましてやエースで四番でもないし、右利きじゃなくて左利きだから、そんなに困らなくて良かったね。

黒いカバンに教科書を詰める拓ちゃんの背中に向かってそう呟くと、また少しだけ笑って、そうだね、と答えた。教科書をきちんと毎日家に持って帰る姿を見ていると、拓ちゃんも優遇される方の人だと思う。

自分のほとんど空の鞆を肩にかけて、重たい黒い鞆を持ち上げた。

「今日だけあたしが持ってあげる。」

いいよ、利き手は空いてるんだからと言う拓ちゃんを置いて先に教室を出た。
乾いた冷たい空気。日差しが強くて夕方なのに朝みたい。
長い廊下の端にあたし達がいる。
無機質なギブスを首から吊り下げた、隣に拓ちゃんがいる。
ギブスの内側には、ずれて互いにそっぽを向いた骨がある。
白いザラザラの中で彼らは2ヶ月の時間をかけてゆっくり戻っていくのか。

「治る頃には18歳になってるね。」

鞆の重さの分だけ、拓ちゃんの誠実さとか優しさが詰まっている気がして嬉しい。
2人で一步一步長い廊下を歩く。

もうすぐ季節は冬になる。